

# うしお

第114号

昭和40年12月

## 目次

大口養魚場業務概況 (10月分)	大口養魚場	1
定置観測(10月分)	養殖部	4
10月のマグロ延縄漁況	漁業部	6
漁場観測速報(10月分)	養殖部	7
イセエビの蓄養殖と航空機輸送による県外出荷について	種子島地区改良普及員 大木三雄	9
一般漁況(10、11月分)	漁業部	13
漁村のことわざ(その6)	北山易美	15
奄美短信	大島分場	16
業務概況	編集部	17

鹿児島市城南町20番12号

## 鹿児島県水産試験場

大口養魚場業務概況（10月分）

大口養魚場

1、概況

アユ養成も10月で給餌を終了した。今年は尾数歩留、増肉率ともに例年より良好であつたが、県内生産量の増加にともなつて出荷時期を遅くしたため、平均単価はkg当り600円程度であつた。なお出荷魚の保有があるが11月上旬に出荷予定である。

マス稚魚の配布も多く県内のニジマス養殖業も増加する傾向にある。

流通関係では、コイ、ニジマスについて県外から釣堀用の照会があるなど今後期待がもたれる。

40年度整備工事のうちふ化室の増改築補修工事が着工され、浄化槽等の工事も近く着工の予定である。

2、10月の飼育現況

飼育魚種	10月1日 推定飼育数	月の 推定増重	処 分 内 訳			11月1日 推定飼育数
			販 売	死 魚	不明減耗	
稚 ま す	565,259 <sup>尾</sup>		37,813 <sup>尾</sup>	3216 <sup>尾</sup>		524,230 <sup>尾</sup>
食 用 ま す	871.8 <sup>kg</sup>	70 <sup>kg</sup>	333.5 <sup>kg</sup>	0		608.3 <sup>kg</sup>
親 ま す 候 補	2,426 <sup>尾</sup>		0	0		2,426 <sup>尾</sup>
親 ま す	425 <sup>尾</sup>		0	0		425 <sup>尾</sup>
あ ゆ	433.5 <sup>kg</sup>	0	56.0 <sup>kg</sup>	35.8 <sup>kg</sup>		341.7 <sup>kg</sup>
親 こ い	197 <sup>尾</sup>		♀ 9 <sup>尾</sup> (17kg)	0		188 <sup>尾</sup>
稚 こ い	146,400 <sup>尾</sup>	0	21,050 <sup>尾</sup>	0		125,350 <sup>尾</sup>

3、給餌の概要

魚種別10月の給餌状況は次のとおりである。

	稚ます	食用ます	親ます 及候補	あゆ	親ごい	稚ごい
魚粉	96	1164	42	100	132	
配合	735	776	35	100		
小麦粉	60	568	35	70	248	餌
ペレット No.3	171					
〃 No.4	708					
〃 No.5		202	92		122	止
フィードオイル	102					
nf-180		07	0252			
ビタミン混合			1.17			め
マツカラム 塩			1.98			
干あみ			14			
計	11187	4535	218	270	502	

単位kg

7、種苗配付内訳

(1) にじます稚魚

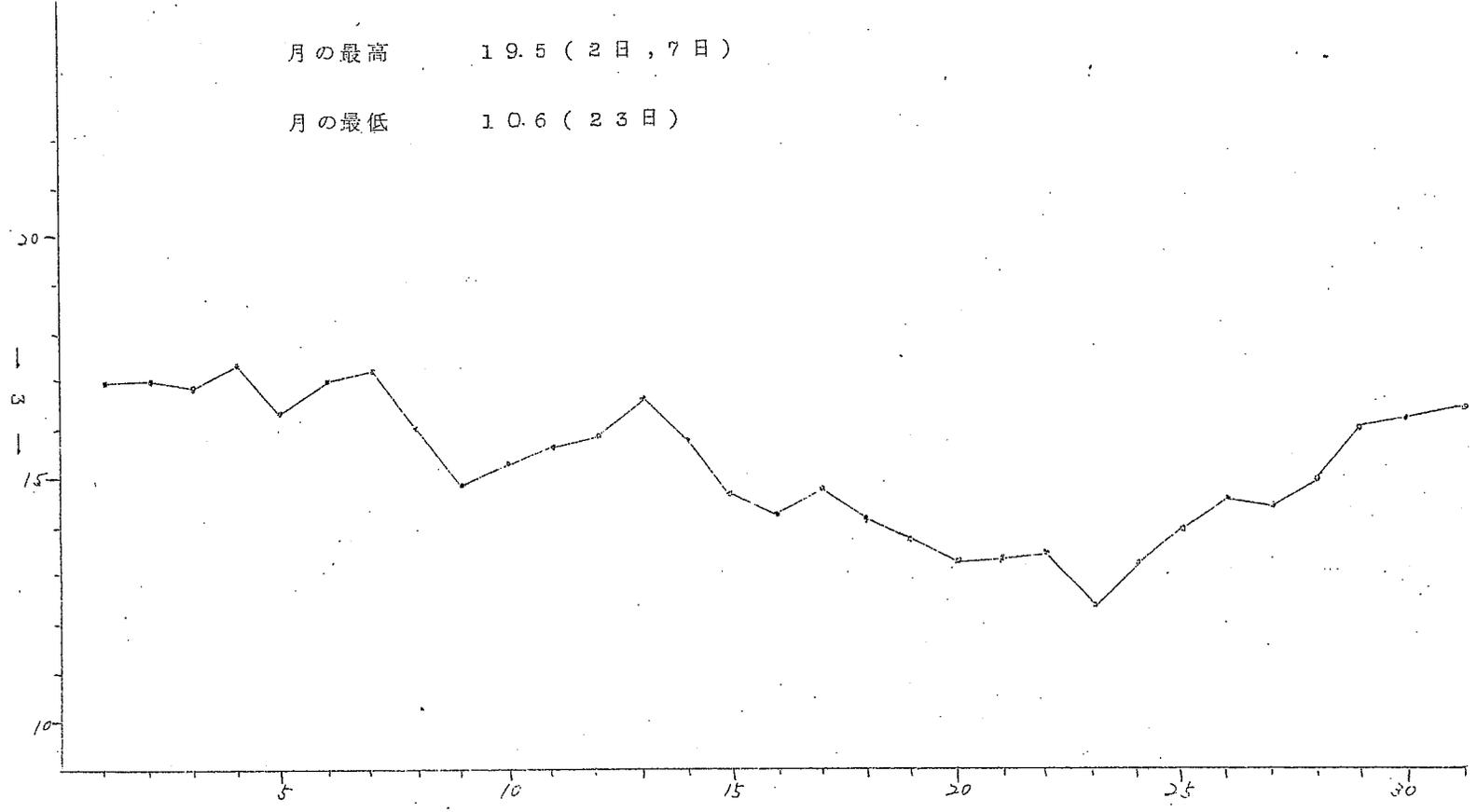
配付月日	氏名	数量	所在地	種苗用途
10 5	有田 貞二郎	10,000	串木野市三井金山	池中養殖
〃 7	藤木 道夫	6,600	出水郡高尾野町	〃
〃 12	渋谷 透	4,900	出水市	〃
〃 13	池畑 重治(外)	1,050	日置郡吹上町	〃
〃 20	清水 文夫	2,000	鹿屋市新川	〃
〃 〃	吉田 義盛	3,000	鹿屋市上はらい川	〃
〃 〃	塩田 兼雄	2,000	〃 〃	〃
〃 〃	森田 重行	1,000	肝付郡内之浦町	〃
〃 26	新沢 栄男	3,000	加世田市津賀	〃
〃 28	松下 彰	3,200	串木野市冠岳	〃
〃 〃	三島 豊(外)	1,063	〃 荒川	〃
	計	37,813		

(註) (外)は100尾未満の端数を示す。

10月の水温変化 (平均) (定点用水路)

月の最高 19.5 (2日, 7日)

月の最低 10.6 (23日)



## (2) こい稚魚

配付月日	氏名	数量	所在地	種苗用途
10 13	池畑重治	11,050	日置郡吹上町	溜池養殖
"	窪田虎雄	10,000	" "	"

## 今月の動き

活魚輸送及び現地指導～前記種苗配付先その他に延7日行つた。

10月1日 薩摩町

同町町営養魚場の親ごいの♀♂選別の現地指導を行つた。

10月7日 出水市

ます及びあゆの新規造池について現地指導。

10月8日 県水産課

昭和41年度事業計画打合せ会議に出席。

10月17日～22日 静岡市

全国湖沼河川養殖研究会養鱒部会出席。

今回は魚病問題及び流通対策について討議された。

10月22日 霧島町

霧島山ろく地帯の観光開発の一端として淡水魚の流通機構について同町の観光開発審議会に出席。

10月26日～29日 川内市、串木野市、枕崎市、山川町、指宿市

東大の江草周三教授の養鱒懇談会及び現地指導。

## 定 質 観 測 (10月分)

養 殖 部

## ○ 旬別平均水温、比重(満潮時)

旬	水 温 ℃				比 重 δ <sub>15</sub>			
	本年	前旬差	前年同期差	平年差	本年	前旬差	前年同期差	平年差
上	23.61	+0.12	-0.80	-1.22	25.24	+0.02	-0.91	+0.29
中	22.36	-1.25	-1.46	-1.29	26.40	+1.16	+0.49	+1.00
下	21.65	-0.71	-	-1.28	26.52	+0.12	-	+0.79
月平均	22.54	-2.37	-	-1.30	26.05	+0.80	-	+0.81

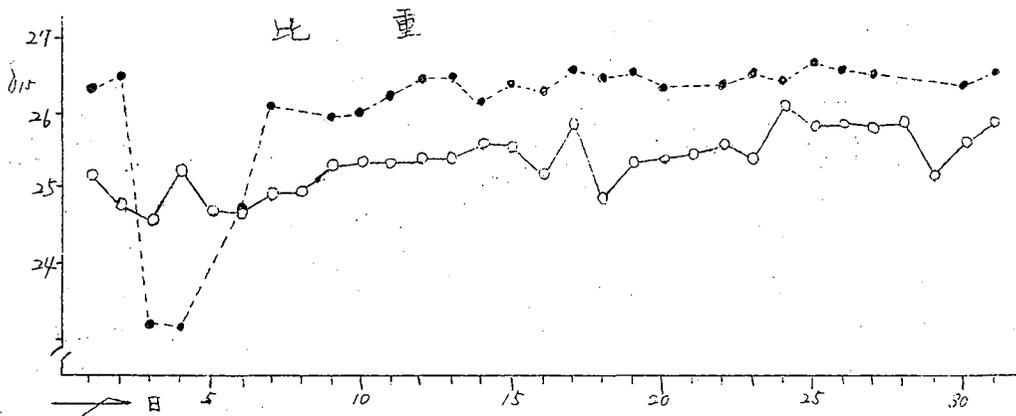
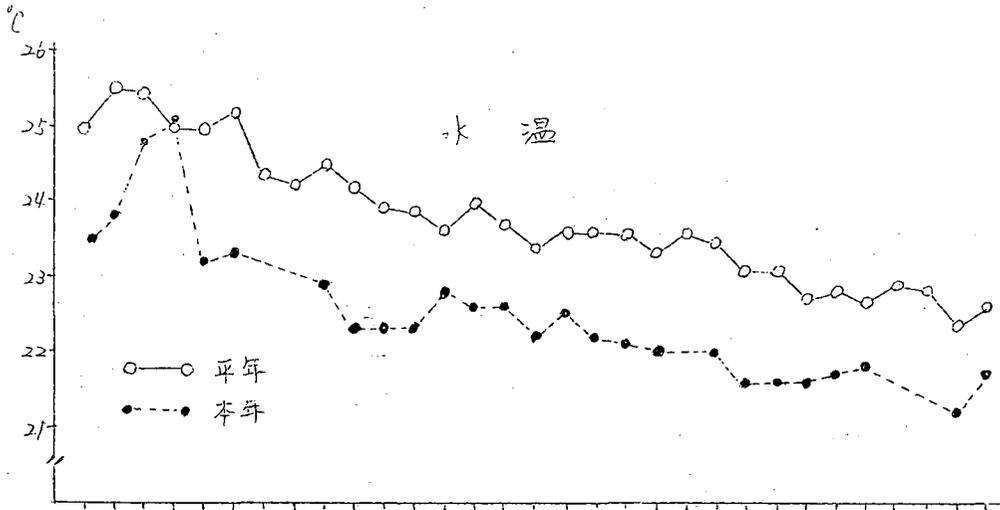
○ 水 温

21.2～25.1℃の間で変動し、順調な降下である。上旬に一時25℃台を示した日もあったが、月間を通じて平年より低目を維持している。月平均水温は22.5℃と平年水温より1.3℃も低く、昭和27年観測以来10月の水温として最低の記録を示した。

○ 比 重

23.1～26.7と変動し、上旬にやゝ変動がみられたが、中、下旬は安定した状態を保っている。月平均比重は26.05と平年値より0.8高目であった。

10月の水温・比重



10月のマグロ延縄漁況

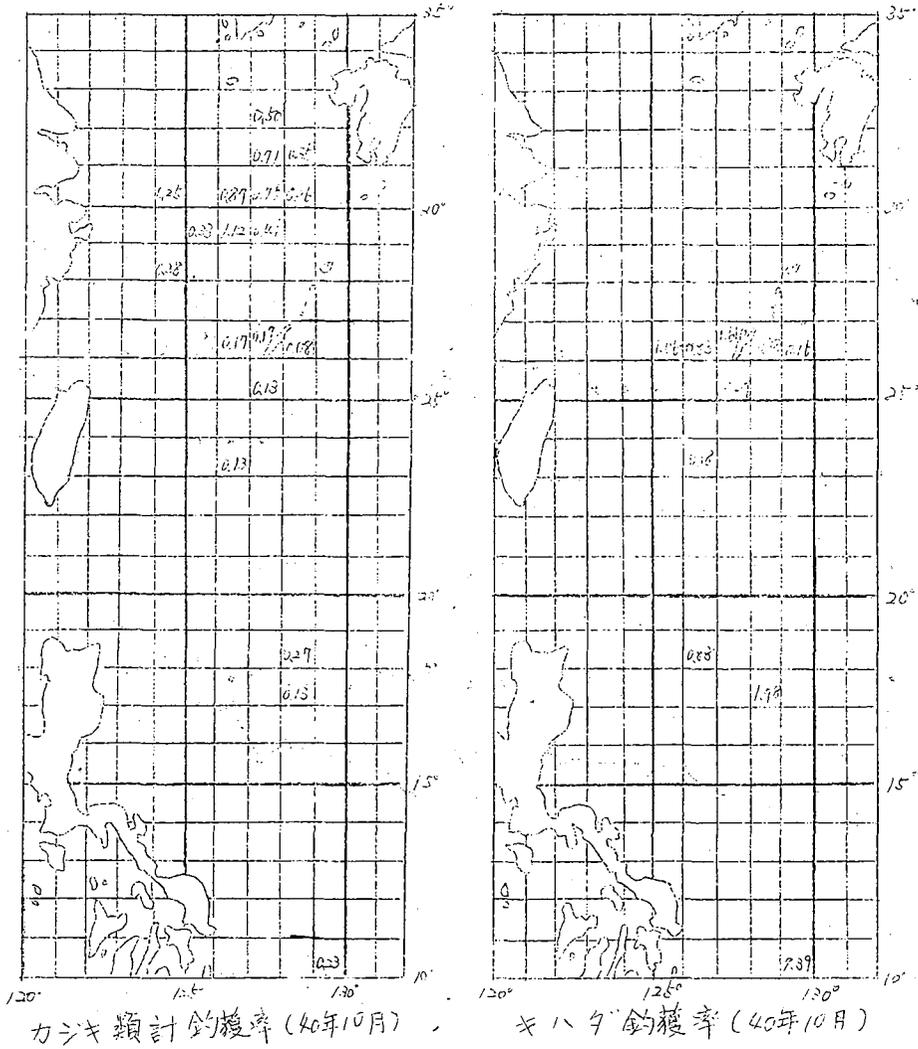
漁業部

10月の主漁場はクロカジキ、シロカジキを目的とする東支那海で、 $25^{\circ}\text{N}$ 以南の出漁は少なかった。

東支那海漁場ではマグロ類は全く漁獲されていずカジキ、サメのみで、 $29^{\circ}\sim 30^{\circ}\text{N}$ 、 $126^{\circ}\sim 127^{\circ}\text{E}$ 附近ではシロカジキ、パシヨウカジキの釣獲率は夫々0.53、0.58と高くなっている。

一方南方漁場( $10^{\circ}\sim 11^{\circ}\text{N}$ 、 $129^{\circ}\sim 130^{\circ}\text{E}$ )ではキハダの釣獲率が7.39と高い値が見られている。

ビンナガは今の処漁獲は少なく未だ漁期には遠い感じである。



漁 場 観 測 速 報 ( 1 0 月 分 )

養 殖 部

I 旬別平均水温

旬 別 観測地	里		水 成 川		福 山	
	最 高	最 低	最 高	最 低	最 高	最 低
上 旬	23.9	23.0	24.5	23.5	24.8	23.6
中 旬	23.3	22.4	23.2	22.7	23.8	23.0
下 旬	22.6	21.7	22.5	21.9	23.4	22.2
月 平 均	23.24	22.32	23.37	22.69	23.99	22.93
前 月 差	-2.19	-2.01	-1.72	-2.37	-2.69	-2.26
前 年 差	-1.88	-2.05	-2.41	-2.37	-	-

- 里村の月平均水温は23.24～22.32℃を示し、前月に比較して2.19～2.01℃低くなつてきている。これを前年同期に比較すると最高で1.88℃、最低で2.05℃いずれも低くなつている。
- 水成川の月平均水温は23.37～22.69℃を示し、前月に比較すると1.72～2.37℃低くなつており、また、これを前年同期に比較すると、最高で2.41、最低で2.37℃低くなつている。
- 福山の月平均水温は23.99～22.93℃を示し、他地区に比してやや高めである。また、これを前月に比較すると2.69～2.26℃低くなつている。
- 西日本海況旬報11月上旬報によると、九州の近海と東シナ海の中部あたりは平年に比べると0.5～1.5℃低く、その他の海域は暖かいところが多くなつたとのことである。

II 漁 況

1、水 成 川

総漁獲量は3,170kgで、これを魚種別にみるとヒラソウダが768kgで全体の24.2%、サバが690kgで21.8%、小鰯が537kgで17.0%、イセエビが508kgで16.0%、瀬魚が385kgで12.1%、キハダが100kgで3.1%となつている。

これを前月と比較すると、総漁獲量は5,084kgの減獲となつている。魚種別には前月サバが全体の63%を占めたのに比して今月は魚種別にはまともな漁獲がみられない。

また、昨年同期と比較すると、有漁日数、出漁船数、総漁獲量ともほぼ同じであるが、イセエビが昨年に比して約2倍の増獲となつているのが目立っている。

旬 別 魚 種	上			中			下			漁 獲 量 計		
	有日	漁数	延出漁船数	漁獲量	有日	漁数	延出漁船数	漁獲量	有日		漁数	延出漁船数
ヒラソウダ	5	17	480	3	10	288						768
サバ	5	15	410	-					3	11	280	690
小ダイ	6	8	100	6	12	169	7	22	268			537
イセエビ	6	19	366	6	16	107	4	7	35			508
瀬魚	5	18	210	3	8	80	2	3	95			385
キハグ				1	1	10	3	13	90			100
トビウオ	1	1	40	1	1	30						70
ボラ				1	1	20	1	1	20			40
メダイ									1	1	30	30
カンパチ									1	4	20	20
ハガツオ									1	3	15	15
イカ									1	1	7	7
計	28	78	1606	21	49	704	24	66	860			3170

## 2、里 村

総漁獲量は7,018kgで、これを魚種別にみると、瀬魚が5,280kgで全体の75.9%を占め、次いでヒロマサが814kgで11.6%、イセエビが695kgで9.9%となっている。

旬 別 魚 種	上			中			下			漁 獲 量 計		
	有日	漁数	延出漁船数	漁獲量	有日	漁数	延出漁船数	漁獲量	有日		漁数	延出漁船数
瀬魚	7	13	985	6	51	1620	10	100	2,675			5,280
ヒロマサ	6	7	580	2	2	234						814
イセエビ	4	10	160	5	50	165	9	90	370			695
フカ	1	1	150				1	10	30			180
トコブシ	1	2	30									30
タマミ				1	1	15						15
サワラ				1	1	4						4
計	19	33	1,905	15	105	2,038	20	200	3,075			7,018

## イセエビの蓄養殖と航空機輸送による県外出荷について

種子島地区水産業改良普及員 大木 三 雄

種子島は鹿児島を南に距ること120 Kmに位置し、東西12 Km南北52 Kmにおよぶ細長い1市2町からなる島です。(別図1)

海岸線は140 Km、イセエビをはじめトコブシ、テングサ類の根付資源に恵まれ島の重要産物となつている。10月初旬イセエビを中心とした1部水産物の鮮魚専用輸送機による大阪出荷を中種子町漁協が計画し、実施したのでイセエビ漁業に焦点をおわせて現況を述べてみたいと思います。

種子島のイセエビの総水揚高は昭和39年において47.400 kg、27.847.000 円、漁期は9月から4月までで大部分が9、10、3月に水揚される現況にあります。

販売面においては3仲買業者(県外2、地元1)との取引が以前からなされ、西之表市の入札価格(表1)が決定されるとこれに準じて中、南種子町の価格は10円から20円の安値で買取られる状態で旧態然とした販売体制下にあつて価格上昇も期待できず、多くの漁業者からも何かと打開策はないものだろうかという強い要望も出され、解決の道を探るべく調査研究が進められていました。

なお、一部においては短期蓄養が実施され、又、定期旅客機の混載貨物として少量鹿児島方面に出荷されていたにすぎません。

9月中旬、県水産課の紹介により大阪合同通運株式会社からイセエビ及び水産物の鮮魚専用機による航空輸送計画がもちこまれ、中種子町漁協が積極的にこれを取りあげ、役職員をはじめ組合員あげてのもえあがる意欲と協力のもとにイセエビの集荷、蓄養が実施されました。蓄養は9月25日から9月30日までの短期で集荷、蓄養を町内3ヶ所の蓄養籠(鉄骨製、全網張、縦横1.50 m、長さ2 m)に1,070 kgを蓄養し、その間の死亡率は7%を示しました。

§ 10月1日イセエビを主体に甲イカ、カンパチ、ハマグリなど混載して大阪向け試験空輸を実施したのでその概要について報告します。

### 空 輸 の 概 要

出荷月日 10月1日  
出荷先 大阪、荷受会社大阪合同通運  
使用機 ダグラスDC3型(鮮魚専用輸送機)  
所要時間 2時間30分(種子島空港～大阪伊丹空港)  
積載量 最大3トン 平均2トン  
出荷魚種 いせえび1,000 kg 甲いか300 kg はまぐり100 kg  
かんばち30 kg

価 格	魚 種	組合買取値	大阪空港渡し
(kg当り)	いせえび	450円	850円
	甲いか	100円	325円
	はまぐり	50円	25円
	かんばち	300円	725円

算

魚種	大阪売渡金額	組合買取金額
いせえび	1,000 kg × 850円 = 850,000円	1,000 kg × 450円 = 450,000円
甲いか	300 × 325 = 97,500	300 × 100 = 30,000
はまぐり	100 × 25 = 2,500	100 × 50 = 5,000
かんばち	30 × 725 = 21,750	30 × 300 = 9,000
計	971,750円	494,000円

諸経費

航空運賃	321,750円 (kg当り225円 種子島～大阪)
生産者支払	494,000円 (組合買取分)
集荷蓄養経費	54,500円 (蓄養中死亡えびの0.7%も含む)
計	870,250円
差引利益	971,750円 - 870,250円 = 101,500円
利益額	101,500円

以上のように初回のイセエビを中心とした水産物航空輸送機による空輸試験は一応の成果を挙げることが出来たと思います。これは従来までの販売のあり方を改善していく転機であり、町、漁協並びに漁業者が一体となつた離島水産業振興への意欲にほかならないものであつて、空輸されたいせえびを中心とした水産物を漁業者自身が産物の価値を自ら求め、漁撈への報酬を評価して離島の水産業の方向を見出し乍ら、生活の向上を探ろうとしたことにほかならないと思考します。

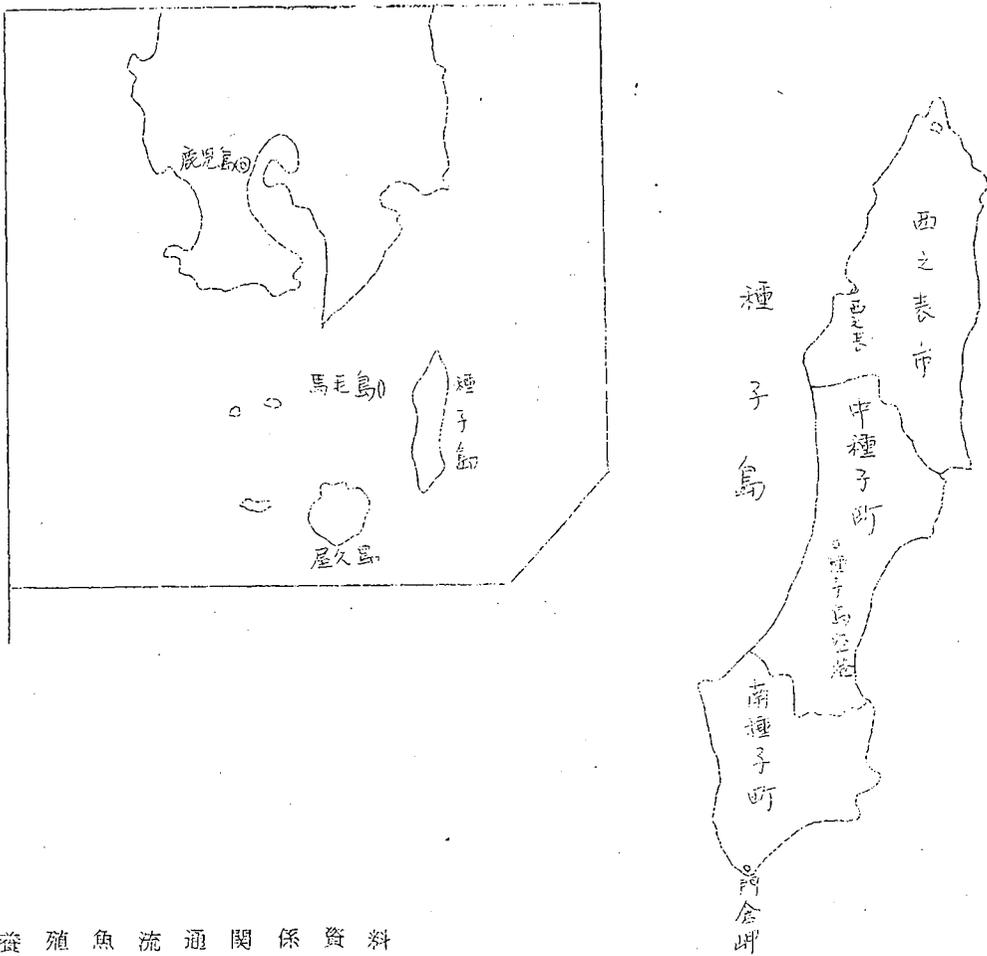
この成果の波及は、島内漁協、漁業者の関心を集め、大きな刺激となり、10月のイセエビ価格は今までにない高値で取引きされている現状にあります。

なお、種子島の水産物ではトコブシ、マダイ、シマアジ、ブリなど高級魚種も多いので、今後は関西をはじめ大消費地市場へ出荷を計画し、相場に応じた出荷体制が確立されるよう島内漁協は互いに緊密な連携をとり、共同出荷ができればよう考究してゆく必要があるかと思ひます。

(表1) 種子島におけるイセエビ価格

年別	月別							
	1	2	3	4	9	10	11	12
昭和39年	655円	655円	655円	655円	430円	530円	655円	655円
昭和40年	670	670	670	650	430	725~ 800		

(図 1)



養殖魚流通関係資料

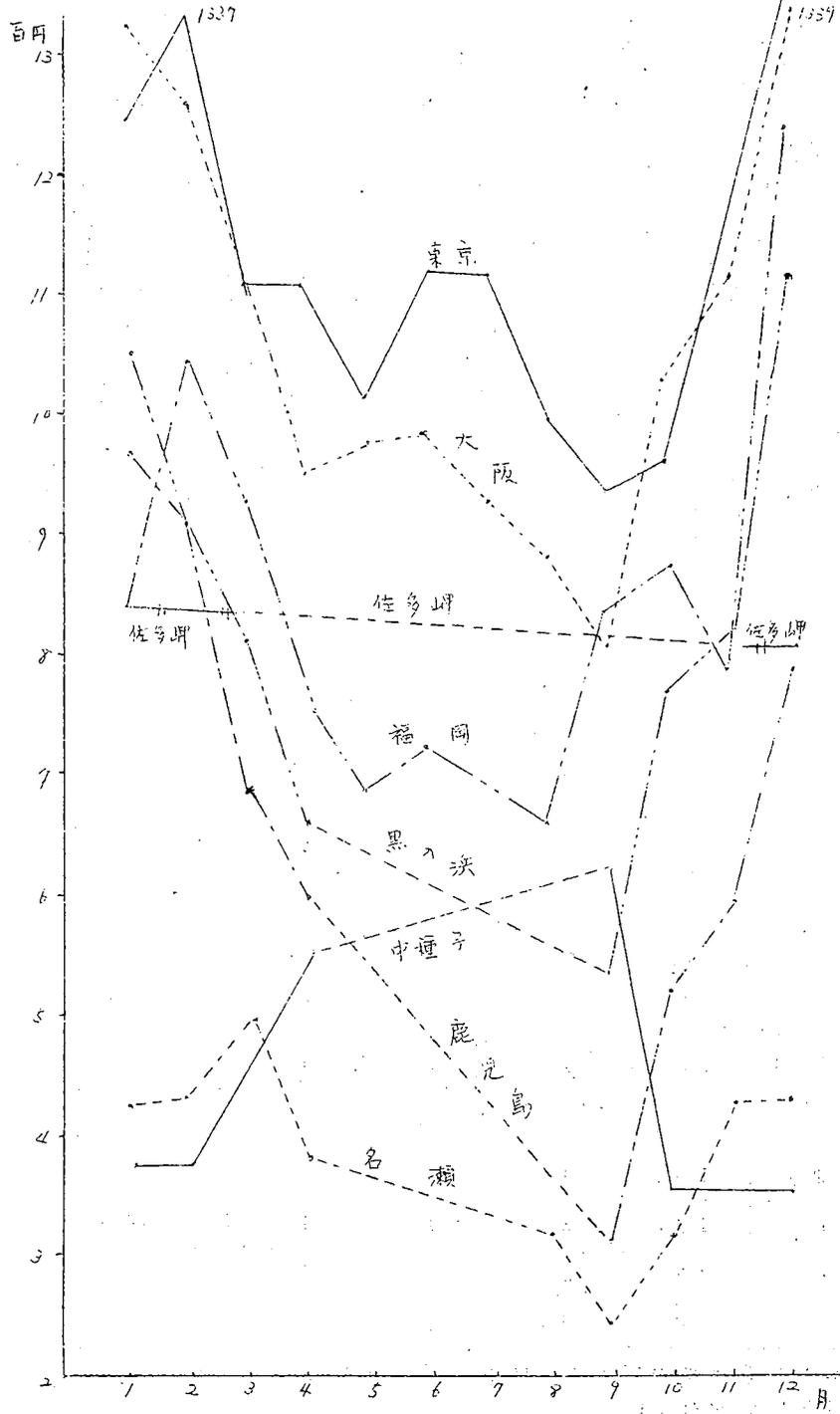
(ア) 航空輸送貨物運賃 (円/kg)

(40年11月)

発着	鹿兒島	福岡	大阪	東京	
徳の島	160円	225円	300円	380円	重量45kg以上は25%
大島	140	205	280	360	
喜界	120	185	260	340	100kg以上は35% 割引される
屋久島	60	125	200	280	
中種子	60	125	200	280	
鹿兒島		65	140	220	

但し、空港から空港までの運賃で、地上運賃(営業所~空港間10kg 30円)は含まれていない。

(イ) 39年いせえび月別市場別単価



# 一般漁況（10～11月分）

漁業部

## 海況

10月上旬の薩南海域の表面水温は屋久島北部海域で25℃台を示し、平年より1℃内外低目となつている。大隅海域では0.5℃内外その他の薩南海域では2～3℃前月上旬より降温し、大隅海域では1～2℃昨年より低目になつている。

11月上旬表層の海況は草垣島から口ノ島を結ぶ沖合域は25℃台の水帯に広くおゝわれ、平年並か1℃低目である。

各海区を10月上旬に比べると全般的に1～2℃低目となつているが、大隅東部では若干高目になつたところもある。なお昨年同期に比べてみると今年は全域にわたつて（草垣～宇治は昨年並）1～2℃も低い。こしき海峡方面では強い南下流があり、その影響は表層で黒島附近まで達している。

## 漁況概要

11月は八田網、旋網（近海）、サバ一本釣、カツオ一本釣とも一般に10月より漁況は悪化した。

旋網北薩海区では、中、小サバ、小、豆アジ、ムロアジが主体で種子島南部漁場ではムロが主体となつている。

八田網も11月は10月の $\frac{1}{4}$ に減少しており鹿児島湾内での操業は10月11月とも見られていない。志布志湾、瀬戸内等ではムロアジ、豆アジが殆んどである。

カツオ一本釣も殆んど船が操業を中止しており入港船は減少の傾向にある。ヨコワ曳網は11月下旬迄漁獲はなく、今後の漁況が危ぶまれる。

種子島近海の小型マグロ延縄は不振のようである。東支那海でも今年はクロカジキ、シロカジキの漁獲が少なく、バショウカジキが多いようである。

瀬魚一本釣は南支那海方面で操業している船は1隻7,000kg近くを漁獲しており近海船もますますの漁獲を揚げている。

10、11月各地の業種別水揚量

業種	漁港	10月			11月		
		水揚袋数	水揚量(吨)	魚種	水揚袋数	水揚量(吨)	魚種
八田網	志布志	63	443	豆アジ、小サバ 小アジ	63	66.1	ムロ、小サバ
	山川	53	392.8	ムロ、小サバ ウルメ	9	34.5	ムロアジ
	枕崎	38	127.2	ムロ、ウルメ	5	44.7	ムロ、ウルメ
	計	154	564.4		77	145.2	
巾着網 (近海)	阿久根	369	1899.2	小、豆アジ、 小サバ、カタクチ	182	856.4	小サバ、豆アジ ウルメ外
	串木野	95	606.4	中、小サバ、ムロ ウルメ	42	501.0	ムロ、小豆アジ 小サバ
	枕崎	279	5179.2	中、小サバ、ムロ 小、豆アジ	84	1905.5	ムロ、小豆アジ 中、小サバ
	鹿兒島	12	783.0	中、小アジ 小サバ	—	—	
	志布志	20	21.2	豆アジ、ムロ	20	12.3	ムロ、豆アジ
	計	775	8489.0		328	3275.1	
東海中着 サバ一本釣	鹿兒島	4	339.0	小アジ、小サバ	14	1014.0	中、小サバ 中アジ、ムロ
	阿久根	62	46.9	中小サバ、中アジ	27	36.6	中、小サバ、 大サバ
	枕崎	56	21.8	小サバ、中サバ	21	6.4	〃
	鹿兒島	28	59.0	〃 〃	62	126.1	〃
	計	146	126.6		110	169.2	
簗受網	阿久根	21	10.5	ウルメ、豆アジ			
	志布志	6	1.3	小サバ、豆アジ			
	計	27	11.8				
カツオ 一本釣	山川	大	24	585.1	大	20	696.4
		小	65	441.8	小	22	220.9
		89	1026.9		42	917.3	
	枕崎	大	44	879.3	大	33	1105.6
		小	33	107.9	小	5	47.1
	計	77	987.2		38	1152.7	

船ん元は3年でとれ

船ん元というのは船の建造資金のことである。建造当時の船は新造船といふけれども、2年目くらいからは中古船と呼ばれ、7、8年もたつとはや老朽船となる。従つて進水の年から減価償却をせねばならない（漁船保険制度の上からは木造船の寿命は8年とされている）。

漁師として船を作つたら進水後3年で建造費を稼がないと、4年目ごろからは修理費がかさんできて、また追々老朽化して思うように操業ができなくなる。船は漁師の生命の綱であるから老朽船にならない3年目くらいまでに建造費を稼がないと次の代船は作れなくなる。また、それくらいのフアイトがなければ漁師とはいえないから転業した方がよい。

川口ちや騒動じや

沖から船が帰つてくる。漁に出て行く船もある。家族の者は獲つて来を魚や釣具を運ぶ、売る者、買う人、船の機関の音、これが川口港の朝の風景であるが、このようなテンヤワンヤの明朗な騒ぎをするとき「川口ちや騒動じや」という。

早かものさい、遅かものさい

のさいは福運のことである。他の船より早く漁場に着いても潮流が悪いとか、水温が低くかつたりして必ず大漁をするとは決つていない。これと反対に機関の調子が悪かつたり、或いはその他の原因で他船に遅れて着いたときちよつと潮も水温もよくなつていて大漁をすることがある。また旅行のとき都合でひと汽車遅れて出発したところ先発の列車が脱線転覆、多数の死傷者が出た、ひと汽車遅れたため命拾いをしたという例がある。遅れたといつても悲観するな、人生は万事塞翁の馬で早くてよかつた場合もあれば遅かつたためよい結果を生むこともある。所謂早かものさい、遅かものさいである。

道具がよくても魚は釣れん

最近釣を楽しむ人が多い。日曜になるとそれぞれ立派な釣道具を肩に出かけるのをよく見るが中には道具に相当の金をかけて所謂道具自慢の人がある。このような人には上手な方はないようである。遊漁だけでなく専業の場合でもその例はある。

船体や装備が申分のない優秀な船だからといつてもいつも大漁をするとは決つていない。むしろ廃船に近いボロ船やいまにも破けそうな古網で大漁をすることがある。要するに漁具よりも腕、即ち獲る技術が必要であるから、漁具だけに専念せず腕を磨くことを忘れてはならない。

なお漁業だけでなく、ゴルフやスキー或いは自家用車でも同じで、腕が上達

してから道具や車は買うべきである。馬買先にくらを買うの諺がある。

岳々は雪、下々は飲ん日和

冬期浜の古老たちの間に交される言葉で自ら決めて休むことである。言うなれば漁民のバカンスである。(休むことをヨクと言う)

冬が来て北西の季節風が吹きすさむ、開聞岳や霧島山の頂きが白くなる。3日も4日もシケ続きで沖には出れない、毎朝空を眺める。西空に雲がかよつていると「今日も西のタンタン吹きじや」とおきらめる。風よけの所に2人3人と寄つて漁の話や船のこと、世間話に花を咲かせるうちに衆議一決「飲もうや」となる。即ち岳々は雪、下々は飲ん日和となるのであつて一名黒ぢよか日和ともいう。(黒ぢよかは焼酎にかんをつける容器)要するに天候の悪いことにかこつけて焼酎を飲もうというときの合言葉である。

(鹿兒島県漁業公社専務取締役)

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆  
☆ 奄 美 短 信 ☆  
☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

み空は高く、我が意気上る、敢為進取の面は赤く運動場は戦の庭ぞ、恒例の古仁霧職域大運動会も古仁霧高グラウンドに於て小雨の中で13チームにより競技が行なわれた。分場も県職チームとして統合出場、添員63人、他の職域よりは大混雑である。だが他チーム選手の手並は10日間位の晴い鍛錬のせいあつてか、我がチームの及ぶところではなかつた。県命に頑張つて漸く13番、特に目を引いた200才リレー、グラウンド(200m)1人1周、100才台なら2人、20才台なら10人、分場からは尾崎さんが出場、大いに頑張つた。スポーツルールにやかましい当地では一週間前に選手名簿提出、それに住民票まで調べるといつた念の入れようである。競技も熱を帯びドラム廻し、輪投げ、びん倒し、かねて運動して見ない人の珍プレー、各チーム1点を争い優勝せんものと声高らかの応援団、小チームのところはテープレコーダーに吹きこんだ応援歌で賑いおどる。幸いの空の下での和やかな一日であつた。肌寒い頃となりましたが本土の皆様御健勝祈ります。

( Y , S )

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆  
 ☆ 業 務 概 況 ☆  
 ☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

§ 本 場 分

○ 漁 業 部

- 照 南 丸
  - 11月1日～8日 漁海況海洋観測（担当者 川上 市正）
  - 12月2日～10日 “ （担当者 徳留陽一郎）
- か も め
  - 11月8日 漁場調査（大島分場）より帰港
  - 11月15日～25日 第3次底刺網漁業試験（担当者 岩倉 栄）
  - 12月2日～9日 第4次底刺網漁業試験（担当者 川上 市正）

○ 養 殖 部

- アワビ人工採苗試験
  - 11月1日以降、こしき島里村産クロアワビについて産卵誘発実験を行ない、誘発に成功した下記の3回分の幼生を室内水槽で飼育中である。
  - 11月15日 セットした卵数約10万個、発生率約70%、初期ベリジャー数、約7万個体。5日後に沈着期に入り、12月上旬現在約1000個体の稚貝となつた。殻長最大1mm（25日目）。
  - 12月3日 セットした卵数約5万個、発生率4%、初期ベリジャー数、約2000個体。
  - 12月8日 セットした卵数約13万個、発生率81%、初期ベリジャー数、約10万個体。  
 いづれも5日後に沈着期に入り5～70ℓ容水槽で飼育している。  
 （担当者 山口 昭宣、椎原 久幸）
- クロチヨウガイ室内飼育実験
  - 3月の人工採苗で得た稚貝を引き続き室内循環水槽中で飼育している。
  - 12月上旬最大殻長6mm。（担当者 瀬戸口 勇）
- フジツボ防除対策調査
  - 10月30日、11月18、19日、12月2日に福山、竜ヶ水地先での着生状況を調査した。（担当者 前田 耕作）
- ノリ実験
  - 9月20日以来引き続き行なつたアマノリ20品種の単孢子放出に及ぼす日長条件の実験は11月17日をもつて終了した。
  - 11月下旬より室内採苗による実験を行なっている。  
 （担当者 新村 巖、椎原 久幸）
- ワカメ養殖試験

- 12月2日～4日 種苗網展開作業（東町）  
 12月6日 養殖展開指導（西桜島村）  
 （担当者 瀬戸口 勇）

○ ノリ養殖指導

- 11月27, 28日 出水市米ノ津漁場  
 12月3, 4日 " "  
 12月10日 指宿市岩本漁場  
 （担当者 新村 巖）

※ 製造部

○ 赤身利用蒲鉾製造試験

アジを原料とする蒲鉾原料開発への一環とし、冷凍すり身法を準用したソルビット入りすり身、加塩すり身を試作、経時毎の凍結貯蔵すり身による蒲鉾製造を実施して適正な処理方法等につき研究中。  
 （担当者 是枝 登 外）

○ 冷凍すり身利用ソーセージ製造試験

助宗タラ冷凍すり身を主原料としたソーセージを試作し、在来製品との比較試験を実施した。  
 （担当者 藤田 薫 外）

○ かつお節かび付試験（継続） （ " " ）

○ 創作試験等

漁村向簡易加工品としてのアジ姿焼、落身利用魚せんべいを試作一方うなぎ蒲焼真空包装の包装皮膜と加熱殺菌の関係を調査し業界指導に当たった。（担当者 木之下耕之進 外）

○ 九州・山口水試利用部会出席（宮崎）（石神 次男、是枝 登出席）

○ 全国蒲鉾展及びアユ加工調査（熊本市、人吉市）（木之下耕之進出席）

※ 調査部

○ イセエビ蓄養試験

としき島平良港において9月2日から実施中のイセエビ蓄養比較試験は11月2日及び12月2日に第2回、第3回の定期測定を行なった。3ヶ月蓄養後になると放養尾数の違いや、投餌区、無投餌区との間に増重や歩留りにおいてかなり大きな差が出ている。試験は1月上旬まで続ける予定で、結果については後日取纏めて報告する。  
 （担当者 九万田一己、荒牧 孝行）

○ 人工餌料（固型）によるハマチ養成試験

40年度は固型餌料だけによるハマチ養成試験を試み、5月24日から桜島水族館野外池及び垂水市、江ノ島地先において実施したが、12月9日魚体測定を行なつて205日間のハマチ養成試験を終了した。  
 現在資料取纏め中であるが、最終取揚げ時のハマチは最大1,335g、平均991.2gあつた。

担当者 島山 国雄 (企 画)  
九万田一己、荒牧 幸行 (蓄養管理)  
上田 忠男、弟子丸 修 (化学分析)

○ 澱粉汚水調査

40年9月24日県主催(漁政課、敏工課、工業試験場、水試)による澱粉汚水対策協議会によつて長期計画がなされ、肝付川水系の汚水調査を主体として定期調査をすることゝなわな。

11月10日には澱粉工場最盛期における水質調査を行ない、12月6日には宮大農学部水沼助教授(水産用水基準専門委員)と共に現地調査を行なつた。

(担当者 上田 忠男、弟子丸 修)

§ 大島分場分

☆ 庶務係

- 10月24日 本場上ノ園庶務部長来場  
分場業務の視察、また試験場研究施設の整備拡充などにつき説明の後、分場提案など聴取討議した。
- 10月28日 県水産商工委員長吉留県議、平、今村県議、権原大島支庁次長外7名来場、視察された。
- 10月29日 鹿大かごしま丸入港  
村山水産学部教授、水産学部3年、4年生来場。
- 11月3日 かもめ丸 坊津町泊經由鹿児島向け出航。

☆ 漁業係

小型巾着網及び底刺し網操業試験

加計呂麻島南岸及び竜郷湾でムロを対象として操業、諸鈍湾、西阿室沿岸域はムロの魚群が多く好成绩であつたが、竜郷湾ではカタボシイワシ、ギンカガミなどの漁獲があつた。尚、この試験で四張網より人力の省力化が出来効率的な漁法であるから今後業者への普及も計りたい。

底刺し網は天候に恵まれず好効果は得られなかつた。今後一本釣の転換漁業として継続試験(漁場調査など)の予定。

☆ 製造係

- 11月5日～9日 荒本節製造 580kg  
荒亀節製造 6,100kg  
割亀節製造 7,490kg  
むら節製造 220kg

- うに歩留り調査
- きりんさい加工試験

- 九州・山口各県水試加工利用担当者会議（宮崎市）出席  
11月5日～6日（出席者 武田 健二）

養殖係

○ マベ室内採苗試験

10月28日 一槽のみ室内飼育継続して他は沖出し完了。27,000余個。

○ マベ越冬試験

川辺郡坊ノ津町泊地先へ11月3日試験船かもめ丸により38年貝38個、39年貝114個、40年貝346個を輸送した。今後これらの成長、成熟度及び歩留り等について奄美大島との比較を行う。

○ 第一回籠取り換えを11月17日～19日行い、これに依り本年度の歩留りについて大体の傾向が判明する。

○ イソノリ網ヒビ養殖試験

11月11日～12日 名瀬市大熊地先にて網ヒビ建込みを行う。この時の水温24.1℃で昨年同期に比べてやや高めであるが、網ヒビ取揚げ迄には23℃前後に下るものと思う。